

## 筋萎縮性側索硬化症患者の退院支援における看護に関する考察

～人工呼吸器を装着し退院となった1事例の排泄に関する援助の振り返りを通して～

Consideration about nursing supports through the discharge management of ALS patient.

西7階病棟 ○小原 由美 宮坂 由紀乃 内田 緑

キーワード：排泄ケア 筋萎縮性側索硬化症 退院支援

### 要旨

今回人工呼吸器を装着し自宅退院する筋萎縮側索硬化症患者の退院支援を経験する機会があり、その中で排泄に関する支援を中心に、看護ケアの振り返りを行なった。その結果、患者、家族の要望をふまえて他部門とカンファレンスを持ち、協力して患者、家族が納得できるように看護介入することが必要であり、また、看護師が困難と思う日常生活援助方法であっても、患者、家族の希望に沿って行うことが必要であることがわかった。

### I. はじめに

これまで急性期特定機能病院のA病棟に入院する筋萎縮性側索硬化症患者 (Amyotrophic Lateral Sclerosis : 以下ALSとする) の多くは、確定診断を目的とする検査入院がほとんどであった。このような現状の中、今回人工呼吸器を装着し自宅退院する患者の退院支援を経験する機会を得た。退院支援を進めていくにあたり、患者、家族から多くの要望があり、その中でも特に排泄の方法に関する要望が強く、退院時までその問題を解決することが課題であった。そこで今回、排泄に関する支援を中心に看護師の退院支援内容を振り返り、患者や家族の要望に応えるために、どのような退院支援を提供すればよかったのか分析したため報告する。

### II. 研究方法

患者、家族の要望、言動に対し看護師が実際に行った退院支援の中で排泄に関する支援について電子カルテ、紙運用のカルテから情報を得て、支援の内容が患者にとって適切であったかを評価していく。

倫理的配慮：分析のための個人情報及び看護過程に関する記録の開示については、本研究の目的、個人が特定されないようにプライバシーを保護すること、研究以外には使用しないことを説明した上、カルテ管理室の同意を得た。また本研究は、看護部の倫理委員会の承認を得ている。

### Ⅲ. 事例紹介

- 1) 事例：50歳代女性
- 2) 入院期間：2007年2月～3月（32日間）
- 3) 入院までの経過：2002年に発症し、2004年ALSと診断。入退院を繰り返し近医でフォローアップされていた。入院前は自発呼吸があり、気管切開はされていたが、人工呼吸器は装着されていなかった。排泄は自尿があったため、家族が一人でポータブルトイレへの移動を行っていた。今回、近医にて胃ろうチューブ交換後腹痛あり。救急搬送され、入院時尿留置カテーテルが挿入された。腹膜炎と診断され、2/2緊急手術が施行された。術中人工呼吸器装着し、術後人工呼吸器離脱困難となった。
- 4) ADL：目と足の指先がわずかに動き、コミュニケーションはまばたきか足先の僅かな動きを利用し、コミュニケーションツール（レッツチャット）を使用していた。
- 5) 患者の背景：家族構成は夫、長女、長男、次男で、同居しているのは夫、長女、次男の4人暮らし。ALS発症から現在まで、夫が中心となり家族全員で本人の希望にそった在宅介護をしていた。今回の入院前に4回A病棟に入院している。
- 6) 看護師の思い：今まで家族から日常生活援助に関する要望が強く、看護師もできる限り希望にそった看護を提供していた。前回入院時、気管吸引について家族へ指導したが、手技はすぐに覚え、実施することができた。医療行為に対し抵抗はなく、むしろ簡単にできるという意識があるように感じた。

### Ⅳ. 結果

退院準備を進めていくにあたり、看護計画の問題点立案し、目標を設定した。

看護問題：人工呼吸器をつけて退院することで、今までの日常生活が変化することに患者、家族とも不安がある。

看護目標：家族の介助で安全、安楽に排泄ケアが受けられる。

表1. 退院までの支援経過

日付	本人、家族の要望、反応	患者の状況、医師カルテ内容	看護アセスメント 看護師の思い	実際に行った看護ケア、退院指導
2/15		<夫と相談>在宅の準備を徐々に進めていく。		

2/21	尿管を抜いてトイレへ移動したい。今まで通り、トイレへの移動はできる。	<在宅スタッフとの合同カンファレンス> 呼吸器をつけての移動はリスクが高い。その旨を本人、家族へ理解してもらいできることをする。しばらく尿留置カテーテルはやむを得ない。3/5の退院を目指す。医師から、尿留置カテーテルのまま退院が安全であると家族に説明される。	家族の要望とカンファレンスの内容が一致していないが、受け入れられるのか？患者、家族の希望に応えたい。 現在の状態でどの程度の離床が進められるのかりハビリテーション部に相談してみよう。	在宅スタッフとの合同カンファレンスの出席。
2/22		<医師、リハビリテーションスタッフと合同カンファレンス>	リハビリ、主治医と協力し離床進めていく必要あり。	リハビリ、主治医へ依頼し合同カンファレンスを開催。
2/23 ～	医師から説明されたが、一度尿管留置カテーテルを抜いてみたい。	2/24 ベッドアップ開始。 2/27 ベッドアップ90度。 医師・看護師・理学療法士・作業療法士・家族とともに行う。		退院カンファレンス実施。在宅でポータブルトイレへ移動することを目標にする。まず端座位練習、次尿管留置カテーテル抜去しての移動を試みる。
3/1		端座位訓練開始。	在宅に向けてポータブルトイレへ移動できるかもしれない。	医師・看護師・理学療法士・作業療法士・家族とともに端座位訓練の実施。
3/2		ポータブルトイレへ移動。	ポータブルトイレへ移動できてよかった。	家族とともにポータブルトイレ移動介助。

		医師・看護師・リハビリテーション部・家族とともに。尿留置カテーテル抜去。自尿なし。		
3/3	やっぱり尿の管を入れて欲しい。	尿留置カテーテル再留置。	もう少し抜去したまま様子を見た方がいいのではないか。	
3/4	昼間は尿の管を抜いて、夜入れて欲しい。 導尿に対する家族の反応：できるできる。	尿留置カテーテル抜去。 自尿なし。 夜尿留置カテーテル再留置。	自尿がないなら、間歇的導尿を試みよう。	家族へ導尿指導。
3/5	尿の管を抜いて欲しい。	尿留置カテーテル抜去。 退院。	家族だけでポータブルトイレへ移動したことがないため、この状況では排泄に関して心配がある。	在宅ケアチームに継続を依頼することを入院経過要約へ記載。

患者、家族の要望を取り入れ、他部門と話し合いながらポータブルトイレへの移動方法を決定した。

- 1) 看護師が頭を支え少しずつベットアップしていく。家族、理学療法士が体、看護師が頭を支え、医師が人工呼吸器回路を持ち、端座位をとる。
- 2) 一次的に人工呼吸器をはずし、家族が患者の体を抱きかかえ、看護師が頭部を保持し、もう一人の看護師が下着を下ろし、ポータブルトイレへ移動。移動後すぐに医師が人工呼吸器を装着。(一時的にSPO2は80%台へ低下するが、すぐに人工呼吸器を装着しSPO2は上昇した。)

- 3) トイレ中は家族が体、看護師が頭、医師が人工呼吸器を支えている。
- 4) 同様の方法でベッドに戻る。

ポータブルトイレへの移動時以下の点を工夫した。

- 1) 患者、家族の要望を取り入れた方法で行う。(流涎に対しティッシュを加える)
- 2) 頸部の固定(必ず一人が支える)
- 3) 介助者は必ず4人以上。

## V. 考察

A病棟では人工呼吸器を装着したALS患者を、全介助でポータブルトイレへ移動することは初めての経験であり、看護師が慣れていないため、移動介助に時間を要し、体の支え方にもとまどった。また介助に人手が必要なため、タイミングよく介助ができないこと、家族の要望が多いこと、人工呼吸器装着で安全に移動しなければならないことで看護師の精神的ストレスがあった。しかし、その一方患者、家族の要望に応じてあげたいという思いもあり、試行錯誤を繰り返した。その結果、医師、リハビリテーション部とカンファレンスを持ち、患者、家族の要望にそった看護計画を立案し、目標設定をして、患者を安全にポータブルトイレへ移動することができた。ポータブルトイレへ移動後自尿がなく尿留置カテーテルの抜去と再挿入を繰り返したが、排便についてはポータブルトイレで排泄したいという患者、家族の希望をかなえることができた。ALS患者で人工呼吸器装着中でも、安全にポータブルトイレへ移動できることを経験し、看護師にも達成感があったと思われる。

本事例を振り返ることで患者、家族の要望を聞き、それをふまえて他部門とカンファレンスを持ち、協力して患者・家族が納得できるように看護介入することが必要であるということがわかった。また、看護師が困難と思う日常生活援助方法であっても、患者、家族の希望に添って行うことが必要であると再確認することができた。今回の事例患者は退院準備の開始が遅れたため、退院間際まで尿留置カテーテルの抜去と再挿入を繰り返しており、このような人工呼吸器装着というような変化がある患者は特に早期より退院準備を開始することが重要であると考えられる。

## VI参考文献

- 1) 坂本 美佐子: ALSの単身療養者事例への在宅移行期支援における訪問看護の役割(第1報) —長時間滞在型訪問看護サービスの意義を考える—, 日本難病看護学会誌, 12(1), p.49, 2007